

アリストテレスに於ける認識論的思想の發展 (承前)

藤井義夫

原理的認識

我々は新しく出發しよう。アリストテレスは「分析論後書」の冒頭に於て、「知性的なる凡ての教へ及び凡ての學びは既存の認識から生じる」と書いてゐる。^①我々の學的認識はつねに豫め知られたものから出發しなければならぬ。我はすでにエピステメが論證的方法によつて對象の一般性を顯はにすることを、そして對象の一般性を探究することは事物の本質を、事物の根據を普遍的に究明することであり、そこからしてエピステメがアイステシスに對して優越的なる地歩をかちうる所以を明かにした。ところすでに言はれたやうに我々は事物の根據を「論證を超えてあるもの」(ἐπέκεινται)なくしては決して把握することができない。我々は事實——*τὸ ἄληθινόν*——を知るまへにその事由——*αἰτία*——を知ることができない、事物の事實的知識なくして我々はその本質を知ることができない、我々が事實をもつときはじめてその根が據探究されるのである。^②同様にして論證がそこから出發するところのアルケもまた第一なるもの、直接なるもの、よりよく知られるものであり、しかもそれが非論證的である限りに於て、論證に對して或る事實的なるものと呼ばれてもよいであらう。それ故に*ἐπιστήμη*の認識が可能であるためには二つの*ἐπιστήμη*が前提されねばなら

ぬ。すなはち一は我々の認識に於ける「下からの道」を可能とするところの事實的世界であり、他は「上からの道」を可能とするところの原理的世界である。そしてこのことは $\alpha\lambda\theta\eta$ なる言葉がもつところの二重の意味——*initium et principium*——からも容易に理解しえられるであらう。我々はすでに我々の認識の「下からの道」を可能にするところのアイステシスについて究明した。そしてその上層の領域たるアポダイクシスの構造を檢覈することによつて、それが再び論證的ならざるものに依倚する所以をも明かにした。そして今や我々はニピステメの原理を明かにすべき場所に達してゐる。ここでは我々はさきの論證的認識に倣つて、一、原理的認識の對象としての原理の本質、二、原理的認識の方法としての歸納法、が我々の考察の主題となるであらう。

① Anal. post. A 1, 71 a 1-2. Eth. Nic. Z 3, 1139 b 26-27. Metaph. A. 9, 992 b 30.

② Anal. post. A 24, 85 b 27-35. $\nu\sigma\mu\epsilon\iota$ A 31. 參照。

③ Ibid. B 8, 93 a 16-24. 10, 93 b 32-37.

原理的認識の對象としての原理の本質

論證的認識の出發をなすところのアルケそのものの直接なる把握はエピステメから區別されてヌウスと呼ばれる。しかしそもそも「論證の原理」($\alpha\lambda\theta\eta$ *arrobekritikē*)と言はれるものは如何に理解さるべきであるか。この問題にたち入るまへに、我々はアリストテレスに於て一般にアルケなる言葉が如何なる意味を擔つてゐたかを概観せねばならぬ。

アルケとはまづこの言葉の根源的な意味に従つて、凡ゆる事物がそこから出發するところの始元、すなはち「最初のもの」(*to prōton*)である。アリストテレスにとつて $\alpha\lambda\theta\eta$ と $\pi\rho\omega\tau\omicron\varsigma$ とは決して別のものではなかつた。①ところで「最

初のもの」なる言葉は種々の意味に語られる。なぜならばそれは概念に於て、時間に於て、或は認識に於て「最初のもの」でありうるからである。^② あたかもそのやうにアルケもまた廣義に於ては、「事物がそこからして存在し、生成し、或は認識されるところの最初のもの」(τὸ πρῶτον εἶναι ὅθεν ἡ ἕξις ἡ ψυχῆς καὶ τῆς σαρκὸς)である。^③ 換言すればそれは存在の本質性、現實性、眞理性の原理であるに外ならぬ。

周知のやうにアリストテレスにあつては上の三つの「原理」の外に「原因」(αἰτία)の四つの區別が存在してゐる。 *ὑποκειμένου, ὕλη* (causa materialis); *τὸ τί ἦν εἶναι, εἶδος* (causa formalis); *ἡ ἀρχὴ τῆς μεταβολῆς* (causa efficiens) *τὸ τέλος, οὐ βίαια* (causa finalis). けれども如何なる關係をもつてゐるか。アリストテレスはこれらを意識的に區別して用ひることをしなかつたやうにみえる。なぜならば「形而上學」のある場所に於て、「原因もまた(原理と)同じ仕方で語られる、なぜならば凡ての原因は原理であるから」(αἰτίας δὲ καὶ τὰ αἰτία λέγεται τὰντα τὰ τὰ αἰτία ἀρχαὶ)と述べ、また他の場所では「智慧は第一原因と原理とに關してゐる」(σοφία περὶ τὰ πρῶτα αἰτία καὶ τὰς ἀρχάς)と規定し、第一原因のみを原理に等置したやうに思はれるからである。我々はこの問題について次のことを示唆しておかう。「自然學」に於て明示されたやうに、^④ 上に掲げた原因の中後の三つは相互に聯關をもつてゐる。すなはちアリストテレスにとつて事物の内在的目的は形相的實有の中に見出されるからして、目的因と形相因とは同じである。のみならず運動因もまた種的には形相因と同一である、人間が人間を生むのだからである。たとへば生物に於て魂は肉體の原理であり、この三つの原因を統一するものとして表はれてゐる。なぜならそれは運動の原因でありまた生ける肉

體の目的でありさらにウシアだからである。^⑦ それ故に原因を質料因と形相因との二つの範疇の下に收め、それらは第二哲學(αἰτιατικὰ φιλοσοφία)の對象たる自然學的存在(ὅτι ἐν φυσικῇ)の原理として、「第一哲學」(πρώτη φιλοσοφία)の對象たる存在(ὅτι ἐν οὐρανῷ)に關する一般的原理からは區別されるべきであらう。

ところで原理はこのやうな廣義的なる用法に限局されないで、狹義的には「論證の原理」を意味してゐた。原理はそこからして凡ゆる事物が存在し生成するところの始元であるのみでなく、その最も根源的意味に於ては我々の認識の基礎を提供し、我々の認識を基礎づけるものでなければならぬ。かくして「事物がそこからしてまづ知られるところのもの、それが事物の原理と言はれる、たとへば論證の前提である。」(ἐν τῷ οὐρανῷ φυσικῶν τῶν πρώτων καὶ οὐρανῶν ἐπειρῶν, τὸ ἐν οὐρανῷ ἀποδείκναι αἰτιολογίας)として我々の考察の對象はまさしくこの狹義に於けるアルケに限定されねばならぬ。我々の認識がそこから出發するところのアルケとは何であるか。それは屢々言はれたやうに、アポδείクシスが自らの根據とするが故にアポδείクシスそのものによつては解明しえざるものである。「分析論後書」に明記されてゐるやうに、「原理は論證の媒介されざる前提(ἀποδείκναι πρώτων ἄμεσων)である。媒介されざるとはそれに先行する他のものが存在しないことである。」^⑧しかしこの意味に於けるアルケも決して一義的でない。我々はその基礎的な意味が何であるかをよりよく把握するために、まづアルケの名の下に呼ばれた種々の言葉を擧示してみよう。

① Anal. post. A 2, 72 a 6 τοῦτ' ἔστι λέγειν πρώτων καὶ ἀρχῶν. Top. A 1, 121 b 9—11.

- ② Metaph. Δ 11. 514 Z 1, 1028 a 32-33. 参照。
 ③ Ibid. Δ 1, 1013 a 17-19.
 ④ Ibid. Δ 1, 1013 a 16-17. Bonitz: op. cit. p. 222.
 ⑤ Ibid. A 1, 981 b 28. De gen. et corp. A 7, 324 a 27.
 ⑥ Phys. B 7, 198 a 22-27. Metaph. H 4, 1044 b 1. Δ 4, 1015 a 10.
 ⑦ De an. B 4, 415 b 8-12.
 ⑧ Metaph. Δ 1, 1013 a 14-16.
 ⑨ Anal. post. A, 72 a 7-8.

アリストテレスは「シネロギスモスの直接の原理」について、「それを證明することはできないけれども、(その限りに於てなほアルケに屬してゐるけれども) なにかを學ぼうとする者が、それを必然的にもつてゐるとは限らないものを私は定立(δένει)と呼び、なにかを學ぼうとする者が、それを必然的にもたねばならぬものを公理(ἀξιωμα)と呼ぶ^①と述べてゐる。それ故に我々は「論證の原理」をテシスとアクシオマに求めることができる。我々はまづ「數學に於て公理と呼ばれるもの」(τὰ ἐν τοῖς μαθηματικαῖς ἀξιωματικαῖς ἀρχαῖς)からはじめよう。アポデイクシスは公理を缺して缺くことができない。「なぜならば諸公理は最も一般的なものでありそして凡てのもの^②の原理だからである。」(καθόλου τῶν μαθηματικῶν ἀξιωματικῶν ἀρχῶν τὰ ἀσφάλιστα ἔστιν) それは他のものから分離されたある固有なる存在にではなく、凡ての存在に屬しそして存在する限りの存在の本質を規定する。かくて公理の究明は一般的實有の學としての第一哲學の課題となるのである。しかし我々は今かゝる意味に於ける公理の詳細なる討究に立ち入ることはできない、たゞ次のことを指示すれば充分であらう。

凡ゆる學はアクシオマを共有してゐる。このものはそれ自らに必然的に存在しそして信ぜられねばならぬ。なぜならばアポデイクシスは外的なロゴスではなく魂の中にあるロゴスにむけられ、我々は前者に對しては抗しうるけれども、後者はつねに信ぜられねばならぬからである。^③ アクシオマタの中まづ凡てのものを肯定しそして否定することを *reductio ad impossibile* に導くところのいはゆる矛盾律が措定される。^④ アリストテレスはこれを「形而上學」に於て、詭辯的な抗議に備へるために、細心に定義してゐる。「同じものが同時に同じものに同じ關係に於て屬しそして屬しないことは不可能である。」^⑤ (*tò p̄n̄ eĩs̄tō eĩnā ũtr̄eĩp̄zeĩv̄ tē xaī p̄n̄ ũtr̄eĩp̄zeĩv̄ d̄oũv̄ar̄ov̄ t̄ō ād̄t̄ō xaī xar̄ā t̄ō ād̄t̄ō*) 矛盾律は凡ての原理の中最も強力なるものといはれねばならない。何人にとつても同じものが同時に存在しかつ存在しないことは不可能である。もしやうでないならばひとは反對の意見を同時にもつこととなるであらう。それ故に論證を試みるころの凡ての人はそれをこの究竟的判断(*ep̄ist̄em̄ēn̄ēn̄*)の中に基礎づけなければならぬ。「なぜならばこのものはその本性上他の凡ての公理の始元だからである。」(*pr̄oc̄eĩs̄ t̄eĩp̄ d̄oũn̄ xaī t̄ōn̄ x̄īl̄ov̄ d̄eĩp̄oũd̄eĩv̄ ād̄t̄eĩn̄ p̄k̄eĩv̄ov̄*) しかし矛盾律はアリストテレスに於て、上の嚴密なる規定と並んで、なほ種々の表現をもつてゐる。「矛盾的項が同時に同じものに關して眞理であることは不可能である。」「反對の關係にあるところの肯定と否定とが同時に同じものに屬することは不可能である。」^⑦ 矛盾律からして直接にいはゆる排中律が導出される。「矛盾する項の間には何者も存在することはできない、むしろ或る一なるものが一なるものについて肯定されるか、或は否定されねばならない。」(*h̄īk̄ā p̄n̄ ov̄oũf̄ p̄er̄aĩt̄ō d̄r̄īp̄t̄eĩd̄eĩv̄s̄ eĩv̄oũd̄eĩv̄ar̄eĩv̄ eĩv̄ar̄ oũt̄eĩv̄, d̄īk̄ā d̄eĩv̄eĩv̄n̄ t̄eĩ p̄oũv̄ar̄ t̄eĩ d̄r̄oũq̄eĩv̄ar̄ eĩv̄ xaī t̄eĩv̄oũs̄ oũt̄oũv̄*) へのことは我々がそれを眞僞の定義に關聯せしめるとき明かとなるであらう。すなはち存在をありと云ひ、非存在をあらずと云ふことが眞であり、その逆が僞である。

それ故に存在或は非存在について語るものは眞と僞とを語ることになるであらう。しかるに排中律を否定し、その矛盾項に中間項を措定しようとする人々は、存在についても非存在についても、それがあつたはあらずと述べることはできない。従つて彼らの言説は眞僞の規定をうけることはできなくなるであらう。ところでこれら矛盾律と排中律との關係は如何に理解されるべきであるか、矛盾律と排中律とは本質的には同一のものであり、たゞ積極的側面と消極的側面との差に過ぎないか、或はそれらは同じ權利を以て獨立的に主張されべきか、さらには排中律自らの中に消極的と積極的部分とを區別すべきであるか、などについて種々の疑ひが横はつてゐる。⑩また通常矛盾律、排中律と並び置かれることをつねとするところの自同律がアリストテレスに於てアクシオマとして自覺されなかつたことは明かであるけれども、その間接的な表現をたとへば「存在はそれが存在するときにあり、そして非存在はそれが存在しないときにあらぬ、といふことは必然的である。」(τὸ μὲν οὖν εἶναι τὸ ὅτι ὅτι ὅτι εἶναι ὅτι ὅτι εἶναι ὅτι ὅτι εἶναι.) といふ命題の中に見出しえぬか否か、さらに後世に於て「充足理、由律」と呼ばれるものがアリストテレスのアクシオマ々の中に見出しえないか否か、などの諸問題についても多くの論議が残されてゐるであらう。しかし我々はこれらの立ち入つた研究を他の卓れたアリストテレス論理學の研究に譲らう。⑪

我々にとつて重要なことは原理の中、凡ゆる學に「共通なるもの」(τὰ κοινὰ)としてのアクシオマが、⑫とくに一般者に於ける「普遍性」(κατὰ καθόλου)の原理として、再びプラトンのダイアイレシスの方法に親近なる關聯を保つことである。なぜならばダイアイレシスは一つの類を通じて存在を非存在から區別し、存在が同時に或る目的について非存在に共在することを禁ずることを本質とするのであるが、これこそまさしく矛盾律の精神に外ならぬからである。⑬

- ① Anal. post. A 2, 72 a 14-17.
- ② Metaph. Γ 3, 1005 a 20. B 2, 997 a 10-13.
- ③ Anal. post. A 10, 76 b 23-27.
- ④ Ibid. A 11, 77 a 22-29.
- ⑤ Metaph. Γ int. - 1005 a 25.
- ⑥ Ibid. 1005 a 22-34. 6, 1011 b 13. B 2, 996 b 26-31.
- ⑦ Ibid. 1016 b 16. Anal. pr. A 46, 51 b 22-22. Kampe; op. cit. S. 227 Anm. 5 参照。
- ⑧ Metaph. Γ 7. int.-1011 b 23-24. ~~24-29~~ 24-29 参照。
- ⑨ Prantl; op. cit. S. 135. Kampe; op. cit. S. 234. Brandis; op. cit. S. 26. Maier; I. S. 74 ff. Zeller; op. cit. S. 240 等参照。
- ⑩ De interpr. 9, 19 a 23-24.
- ⑪ Maier; op. cit. I. Brentano; Aristoteles und seine Weltanschauung, S. 33 ff.
- ⑫ Anal. post. A 32, 88 a 36-37. 76 a 38. 75 a 41. 76 b 14. 41 b 10. Metaph. B 2, 997 a 11. Γ 3, 1005 b 33.
- ⑬ Stenzel; Studien z. Entwickl. d. plat. Dial. S. 59 ff. 参照。

アクシオマが凡ゆる學に共通的に妥當するに反して、或る學に固有なる、しかしその存在性と真理性とが他のアルケから釋出されえぬ限りに於てなほアルケと呼ばれるものが存在する。我々はそれを一般的にテシスと名づけてもよいであらう。さきにも定義されたやうに、テシスは「それを證明することはできないけれども、何かを學ばうとする者が必然的に有つてゐるとは限らぬもの」である^①。従つてアクシオマとの相違は學ぶ者に於ける把住の必然性の中に基礎づけられ、アポデイクシスのアルケとして自らは論證しえざるものでありながら、アクシオマに於てのやうに、學

ぶ者がつねにそれを所有することによつて條件づけられてゐないものを意味するやうにみえる。しかしテシスはむしろある特定の存在に對してのみその妥當性を主張しうるものと解すべきであらう。テシスが固有なる原理 (*epistēmē*) と呼ばれるのはこの意味に於てである。テシスも、しかし、また種々の意味をもつてゐる。一つのテシスがその眞偽に對する信憑に依拠せしめられないとき、すなはちひとがそれについて意見をもたないか、或は反對の意見をもつとき、それは假定 (*hypothēsis*) と言はれる。たとへば幾何學の證明に於て、或る線を事實上さうであると否とに拘らず直線と、或は一呎と「假定する」(*hypothetō*)。

テシスがそれ自身證明しえられるものでありながら、證明されないで假定せられ、しかも學ぶ者がそれを信じて受取る時、それは假説 (*hypothēsis*) と呼ばれる。従つてそれは端的に凡ゆる意味に於てヒュポテシス——*hypothēsis*——であるのではなく、たゞ「かの者に(學ぶ者に)とつてヒュポテシス」——*hypothēsis*——なのである。教ふる者は既にそれについてアポデイクシスをもつてゐることが可能だからである。このやうに自らはアポデイクシスによる眞理を未だ把持してゐないけれども、それが眞理性への信憑を含む限りに於て、さきのアイテムから區別されるのである。^③しかし上に示されてゐるやうに、ヒュポテシスなる言葉はアリストテレスに於て明かに二重の意味を擔つてゐる。第一はさきに *hypothēsis* と呼ばれたところのものであり、プラトンの「ポリテイア」に規定された數學の基本概念としてのヒュポテシス、すなはちもはや證明しえざる第一のテシスに結びつき、アポデイクシスの直接なる原理 (*epistēmē*) の *hypothēsis* を意味してゐた。^④「ニコマコス倫理學」に於て、「行爲に於てはその目的はアルケである、あたかも數學に於てはヒュポテシスがさうであるやうに」と言はれたのもこの意味に於てであらう。第二はさきに *hypothēsis*

proseas)として示されたところのものであり、アポデイクシスの前提としての必然性をもたぬところの、そしてその限りに於てアイテマに近い意味をもつてゐる。このことは、この一般の意味に於けるヒュポテシスが「學ぶ者にとつてのみ假説である」と言はれたことからだけでなく、アリストテレスが認識の原理をときとして假説ではなく却つて非假説的なるもの(ἀναδιόριστος)として標示したことからも明かであらう。かくてヒュポテシスなる言葉がより近代なる用語法としての「假説的」(ἐπιπροσεσας)——或る恣意的なる前提に依存するもの——の意味を擔ふに至るのである。このより一般の意味に於けるヒュポテシスは、しかし、アイテマとともにそれ自身論證の可能性を自らの中に有ちながら、未だ方法的に論證されざるものとして嚴密なる意味に於けるテシスからは除外さるべきであらう。従つてアポデイクシスの原理に耐へうるものとしてはかのプラトンの意味に於けるヒュポテシスが残るのである。

我々はさらに最も基礎的なテシスとして定義(ἀπόδειξις)を擧げねばならない。アポデイクシスの「固有なる原理」としてのテシスは、それ故に、むしろヒュポテシスとホリスモスに歸着するのである。そしてヒュポテシスが事物の存在(ἐπιβασις)を表示するに反してホリスモスは事物の本質(οὐσία)を言表することによつてそれぞれ特性づけられるであらう。アリストテレスはこのことを次の言葉の中に明記してゐる。「テシスの中、一は判断の孰れかの部分を假定するところの、たとへば事物の存在或は非存在を述べるところのヒュポテシスであり、他はさうでないところのホリスモスである。なぜならばホリスモスもテシスであるから。といふのは數學者は單一なるものを量的に不可分なるものと指定するが、それはヒュポテシスではない。なぜならば單一なるものの本質の問ひとその存在の問ひとは同一ではないから。」^⑩このことは「豫め知る」(παρρηγορέω)といふ言葉がもつところの二重の意味に照應する。すなはちひと

は或るものの存在 (ὄν τινος) を假定すると同時に言はれたものが何を意味するか (τί τινος) を理解しなければならぬ。^⑩ として事物の存在の假定にはヒュポテシスが、事物の本質の把握にはホリスモスが定立される。しかしホリスモスは決して單なる言葉の説明 (λόγος ἀποδείξεως) ではなく、それはなによりも事物の本質性を表示するところのテシスである。(ὁ δὲ τὸν κτήσαν ὀργανὸς θεὸς ἐστὶ τὸν τί ἐστὶν ἀναδείξεως) として「定義は事物の本質性のロゴスである」(ἐστὶν ὀργανὸς ὁ τὸν τί ἔχει εἶναι λόγος) といふ表現の仕方はアリストテレスが最も好んで用ひたところのものである。^⑪ しかしそれにも拘らずホリスモスがアリストテレスに於て一般に何を意味したか、また意味すべきであつたかを、我々は決して一義的に決定することはできない。すでにブレンターノも犀利に指摘したやうに、ホリスモスは「トピカ」^⑫、「分析論後書」^⑬、「形而上學」などに於て相異なる——ときとしては相互に矛盾する——規定を以て語られ、従つて彼の定義論を發展史的に述づけることなしには、アリストテレスのホリスモスの意味は全體的に理解されえぬであらう。しかし我々はその發展史的研究を別の機會に留保して、こゝではなによりも「分析論」に於けるホリスモスが問題とされねばならぬ。すでに言はれたやうに、ホリスモスはすぐれてアポデイクシスの前提としてのテシスの名に相應しいものである。なぜならばホリスモスに於て志向されるところの目的は ἁπλοῦς ἐπιστήμη であり、ホリスモスの統一性、一般性はその内容をなすところの實有の統一性そのものから由來し、そして概念の綜合分析を本質とするところの判断ではなく、事物の端的なる言表であり、その眞理性は決してホリスモスによつて保證されえぬからである。このやうにホリスモスがなによりも事物の本質 (οὐσία) にむかふことによつて、それがソクラテスの定義 (ᾠρολογία ἐκείνη) にその精神的起源をもち、そしてとくに一般者に於けるかの本質性 (κατὰ τὴν οὐσίαν) の原理となることも明かであらう。そこからしてホ

リスモスはならにプラトンの *κατασκευαστικὸς* に連り、アリストテレスに於ける「プラトンの最後の現象形態の
一つ」と稱せられるのである。^⑩

かくてアルケの中、凡ゆる學に共通なるアクシオマと或る學に固有なるヒュポテシスとホリスモスとが、それぞれ
一般者の「普遍性」と「本質性」とに對應するものとして重要な意味をもち、それらの意味及び相關がさらに立ち入
つて闡明されねばならぬ。

- ① Anal. post. A 2, 72a 14-17. アリストテレスは *θεσς* の代りに *ακμα* として *κείθεν* 或は *τέθεν* なる言葉を用ひてゐる。(Anal. post. A 3, 73a 8. Anal. pr. B 17, 65 b 5. Top. ⑤.)
- ② Anal. post. A 10, 76 b 29-31. 39-77 a 4. 70 の意味に於て「アリストテレスは *petitio principii* を *αρετρα* と *εξ αγωγῆς* と呼んで *εἰς αὐτό* (Anal. pr. B 16) 〇
- ③ Anal. post. A 10, 76 b 27-34.
- ④ Ibid. 76 b 36 *ἀλλ' ἐν ταῖς προτάσεσιν αὐτῶν*. Metaph. Δ 2, 1013 b 20.
- ⑤ Eth. Nic. H 9, 1151 a 16-17.
- ⑥ それ故に「アリストテレス」の意味に於ける「ヒポテシス」を「アイマ」と解してゐる。
Prantl; op. cit. S. 322 f.
- ⑦ Metaph. Γ 3, 1005 b 14-16.
- ⑧ *ἐπὶ ὑποθέσεως* *ὑποτιθέναι* Waitz; op. cit. II. p. 358 ff. Geysen; op. cit. S. 218 なる参照。
- ⑨ Anal. post. A 10, 77 a 3-4. 76 b 35-36. Altenburg; Die Methode der Hypothesis bei Platon, Aristoteles und Proklus. 1905. S. 91 ff. 参照。
- ⑩ Anal. post. A 2, 72 a 18-24.

- ⑩ Ibid. A I, 71 a 11-17.
- ⑪ Ibid. B 10, 94 a 9-10. *Metaph. Top. A 5, 101 b 38; 8, 103 b 10; Z 1, 130 a 33-34; H 3, 153 a 15; 5, 154 a 31-32. Metaph. A 8, 1017 b 21-22; Z 5, 1031 a 12, H 1, 1042 a 17* 等の他多くの場所。
- ⑫ Brentano; op. cit. S. 16 ff.
- ⑬ Solmsen; op. cit. S. 85. Stenzel; Studien usw. S. 54 ff.

論證的認識がアクシオマタを基礎として、主體としてのゲノスについてその本質的屬性を求めるとき、論證さるべき當の本質的屬性を除く他の二つの要素は論證されざるものであり、その限りに於てアルケの名の下に呼ばれうるであらう。アルケは従つてアポデイクシスに於ける根拠(εξ ἧς)と對象(ἐπί ᾧ)とを意味するやうに思はれる。そして「根拠は共通なるものであり、對象は固有なるもの、たとへば數、大いである。」(αὐτὸ μὲν ὅν ἐστι τὸν κοινὸν, αὐτὸ δὲ μόνον ἴδιον, ἐπι τοῦ κοινού, ἐπι τοῦ ἰδίου.) アリストテレスはこのことをさらに次のやうに示してゐる。「論證的認識に於て用ひられるところの原理の中、或るものは個々の學に固有であり、他のものは共通なるものである、尤も學に含まれた類の中にある限りに於てそれが用ひられるからして、それは類比的に共通なるもの(τὰ κοινὰ ἀναλογικῶς)である。固有なるものとは、たとへば線は、或は直なることはかくかくのものである。共通なるものとは、たとへば等しきものから等しきものを減じても残りは等しい。」^②しかし我々はこゝに明かに二つのアポリアに逢會する。さきに共通なる原理としてのアクシオマタは矛盾律と排中律とを意味すると言はれた。しかるにこゝでは等しきものから等しきものを減じても残りは等しいといふ純粹に數學的なる公理が例示されてゐる。この矛盾は如何に解さるべきか。また我々は固有なる原理としてのテシスがなによりもヒュポテシスとホリスモスとにあることをみてきた。しかるにこゝではアポデイクシスの對象

たるゲノスそのものがアルケといはれてゐる。この矛盾は如何に解さるべきであるか。

周知のやうに、アクシオマはもともとプラトンのアカデメイア及びプラトンの影響の下にあつた數學者たちによつて準備され、數學的諸領域を支配するところの共通なるものの原理であつた。アリストテレスもまたこの言葉の數學的由來を承認してゐるやうに見える。(τὰ ἐν τοῖς μαθηματικαῖς ἀξιωματικαῖς ἀξιωματικαῖς) として上に「同じものから同じものを減じても残りは等しい」といふ純粹に數學的命題を掲げたのもこのことを示すのであらう。しかしそれは凡ての存在にはではなく「凡ての量について共通なるものである」^⑧「限りに於て」、「類比的に共通なるもの」である。この意味に於ては「公理によつて凡ゆる學が共通となる」(ἐπιχειρηματικὰ καὶ ἀποδείκτικα ἀξιωματικὰ) といふ言葉は嚴密に解されることはできぬであらう。^④しかしアリストテレスにとつてアクシオマは單に數學的原理であるのみではなく、むしろ論證的原理(ἀξιωματικὴ ἀποδείξις)として、存在する限りの存在に妥當し従つて基本的には存在學的原理であり、この意味に於て重要な役割をもつものと言はねばならぬ。彼の原始形而上學(ἄνω)に於てアクシオマタの中にこの數學的命題が例示されてゐるにも拘らず、後に(Γ)アクシオマの究明を矛盾律と排中律に限つたのはかゝる思想發展の證跡を示すものであらう。しかし「分析論」に於てかゝる混淆が存在したことは明かである。

さらに固有なる原理はゲノスであるか、ホリスモスであるか。アリストテレスは、それを上に引用されたやうに、事物の定義、たとへば「線はかくかくのものである」(ἡ γραμμὴ ἐστὶν ἑνὸς)として示しながら、またアポディクシスの基體としてのゲノス、たとへば數或は大いさを擧げてゐる。このアポリアはすでに諸家によつて注意され、種々に解釋されてゐる。たとへばマイヤーはアリストテレスに於ける固有なる原理を「或る述語が或る主語について實的

妥當性を以て言表するところの絶對に論證しえざる前提」と解し、ゲノスが原理として示されるのは、「かゝる原理が定義として命題の中に組入れられる限りに於てのみ論證的原理となる」のであると主張してゐる。この解釋は正しくあるやうにみえる。固有なる原理がゲノスとして示されたとき、それはなによりも *Primum* の意味をもち、そしてそれが *Principium* として用ひられるとき、それはホリスモスの中に表はれる限りに於てである、といふ解釋は尠くとも可能である。この意味に於てはアポデイクシスの原理は一義的にホリスモスであるといはれうるであらう。しかしそれによつてはゲノスがアルケとして示された意味はなほ充分に明かにされてゐない。我々はさきにアリストテレスに於て固有なる原理がプラトンの意味に於けるヒュポテシスとソクラテス的なホリスモスの二つを含むことを指摘しておいた。そしてアポデイクシスの原理に於て、*ἡ ἀρχὴ* としてのアクシオマに對して、*ἡ ἀρχὴ* としてゲノス、たとへば單一なるもの或は三角形が提示されるとき、それらはその本質、とともにそれらの存在 (*ἡ οὐσιαστικὴ ἐξουσία*) を前提しなければならぬこともすでに言はれた。⑦ しかも事物の存在にはヒュポテシスが、事物の意味或は本質にはホリスモスが指定されるのであるからして、固有なる原理としてのゲノスは——根源的意味に於ける *ἀρχὴ* なる言葉がさうであるやうに——ヒュポテシスとホリスモスとを可能的形態に於て含むものと言ふことができるであらう。そしてこのことは一般者に於ける *ἀρχὴ* が事物の個體性であるとともにその本質性であつたことに照應するのである。しかも *ἐκ τίνος* はつねに *ἐκ τίνος* を前提してはじめて可能であるからして、その意味に於てホリスモスはその根柢にヒュポテシスを含み、またゲノスもホリスモスとしてはじめて現實的にアポデイクシスの原理たるの意味を全ふすることができるのである。従つてアポデイクシスの原理は端的にホリスモスであると言ひうるのであらう。⑧ アリストテレスが後期的時

代に屬する著作に於て屢々「アポデイクシスの原理は本質的存在である」(ἡ αὐτῆς τῆς ἀποδείξεως ἀνά τὴν εἶσιν)或は「シネロギスモスに於て凡てのものの原理はウシアである、なぜならばシネロギスモスは事物の本質的存在を根據とするか」(ἐν τοῖς συνολογισμοῖς πάντων ἀπὸ τῆς οὐσίας. ἐκ τῆς τοῦ τι εἶσιν αἱ συνολογισμοὶ εἶσιν)と述べたのはかゝる思想の發展として極めて興味深いものと言はねばならぬ。⑩。そしてこのことはアリストテレスにとつて、事物の存在性或は存在の原理を表示してゐたところの τὸ τὴν εἶναι が同時に事物の認識の原理でもあり、また事物の本質性がその認識の限界であつたことと緊密に關聯してゐるのである。⑪。しかしホリスモスに於て端的に表示されるところの實有(οὐσία)或は形相的存在(μορφὴν εἶναι)の究明はまことに「形而上學」の本源的課題に外ならぬからして、アポデイクシスの固有の原理としてのホリスモスは、共通の原理としてのアクシオマとともに我々を「形而上學」の門に導くであらう。

① Anal. post. A 32, 88 b 27-29.

② Ibid. A 10, 76 a 37-41.

③ Metaph. K 4, 1061 b 20-21.

④ Anal. post. A 11, 77 a 26-31. Maier; op. cit. II, I. S. 400, Anm. 1.

⑤ Maier; op. cit. II, I. S. 400, Anm. 2.

⑥ Anal. post. B 3, 90 b 24. A 8, 75 b 30-32. Kamppe; op. cit. S. 210 ff.

⑦ Anal. post. A 10, 76 a 31-36, A 1, 71 a 15-16.

⑧ Ibid. A 3, 72 b 24-25.

⑨ De an. A 1, 402 b 25. Metaph. M 4, 1078 b 24-25. Z 9, 1034 a 31-32.

⑩ Metaph. Δ 17, 1022 a 8-10. 44¹⁴ Heyder; op. cit. S. 338 Anm. 2. 参照。

ところで原理に於ける共通なるものと固有なるものとは如何に關聯すべきであらうか。ある學に固有なる原理は凡ての學に共通するところの原理に從屬すべきであらうか。アリストテレスが形而上學的諸問題の中に於て、形而上學は實有の第一原理のみを管見するか、それとも凡てがそれによつて論證されるところの原理についても觀想するかを問ひ、そして數學に於てアクシオマと呼ばれるところのこれらの原理の考察もまた哲學者の學に屬してゐることは明らかである、といふのはそれは或る固有の類にではなく凡ての實有に屬してゐるから、と答へてゐることはすでに周知のことであらう。アクシオマは凡ての學に共通でありそれを必然性に於て探究する學が存在しなくてはならぬ、そして凡ての實有について考察するところのものはまたシュロギスモスの原理についても考察しなければならぬ。個々の類について最もよく知るものは凡ての中最も確實なる原理をも語ることができる筈である。従つて存在する限りの存在について考察する者は、またかゝる原理をも探究しなければならぬ。しかしアポデイクシスの共通なる原理として前提されるべきアクシオマに對して再びアポデイクシスを要求することが循環を惹起し、それ自身無教養(ἀπειρασία)の證左であるやうに、アクシオマの限界について無知であることもまた教養の缺如を自證するものであらう。アリストテレスがアクシオマの妥當性に對して次のやうな限界を認めたことは、それ故に、原理に於ける共通なるものと固有なるものとの關係の理解について極めて重要である。すなはち凡ての人々がアクシオマを用ひるのは、それが存在する限りの存在について妥當し、各々の類は存在をもつてゐるからである。「しかし(凡ての人はアクシオマを)彼らに充分である限りに於て(ἐπὶ τοῦ ἀποδείκναι τὴν ἀνάγκην)用ひる、すなはちそれについてアポデイクシスが行はれるところの類が達する限りに於てである。」^①「凡てのものは肯定されるか否定されるかであるといふことは *reductio ad*

impossible として扱へられる、そしてこのことはつねに一般的にさうであるのではなくて、充分なだけ、すなはち類について充分な限りに於てである。^②「アクシオマは存在する限りの存在について妥當するけれども、それはつねにして一般的にさうであるのではなくて、我々がさきに固有なる原理として示したところのアポダイクシスの基礎が存在する限りに於てである。基礎としてのゲノスについて、それに本質的に屬するものを知ることがアポダイクシスの本質に外ならぬからである。ゲノスはそれぞれの存在に固有なるものであり、相互の領域の間の移行——*μεταβάσις*——は不可能である。たとへば算數學的領域に於て數についてなされる證明は、空間的大いさについてなされる幾何學的領域に適用されることはできない。^③従つてゲノスにそのものとして屬してゐるところの論證の當體 (*ἀποδείξιμος*) はそれぞれに固有なる原理からの外は論證されえぬことは明かであらう。たとへば眞なる、非論證的なるそして直接的なるものから證明されてもそれはエピステメではありえない。^④我々が個々のものを偶然的にではなく知識するのは、それによつてかのものが屬してゐるところのものに従つて、すなはち個々のものがそのものである限りに於ての原理から、我々が知るときである、たとへば三角形の内角の和が二直角に等しくあることがそれ自らによつてこの主體に屬してゐることをその原理から知るときに如きである。^⑤我々が或る對象に固有なる屬性を明かにするためには、一般的なるそしてあたかもその故にアポダイクシスの對象についてもそれに固有なる本質を明かにしないところのアクシオマを以てしては決して満足することができない。「固有なる原理から證明されない言表は空虚であり」^⑥ (*οἱ γὰρ μὴ ἐκ τῶν οὐκ ἐπιπέδων ἀποδείκνυται κενὸν*) 従つて「アポダイクシスの固有の方は學がそれを取扱ふところの存在のゲノスに固有なるところの原理の中に索められねばならぬ」^⑦と主張されたことも我々は充分承認しなくてはならぬであ

らう。

しかしこのことからしてアクシオマは、プラントルが主張するやうに、共通的意见(*κοινὴ γνώμη*)として極めて低き位置を保ち、アポデイクシスの原理はたゞ「概念」(*εἰδήσεις*)のみであると主張することは明かにゆき過ぎてゐる。^③ アリストテレスにとつてアクシオマは凡ゆるアポデイクシスに於ける究極的判断であり、凡ゆる原理の中矛盾律は最も確實なものである、とさへ主張されたことは、すでに我々のみてきたところである。あたかも論證的認識の對象としての一般者が普遍性と本質性を含んでゐたやうに、その一般者そのものの根柢をなすところの原理的認識に於ける原理もまた共通的なるものと固有なるものとを含んでゐる。このことを我々は決して疑ふことができない。たゞ一般者にあつては普遍性がまづ探究の象面に現はれその本質性はそれを土臺づけるものであるに對して、原理にあつては逆に固有なるものが最も強力に主張され、共通的なる公理はその背後にあつてそれを基礎づけるのである。こゝにまさしくアルケがいはゞ理性的なる事實(*αἰετὰ*)として感性的なる事實(*ἐπιδησιακά*)とともにアポデイクシスに於ける知性的領域(*ἐπιστημονικόν*)の探究を可能ならしむる所以のものがあるのであらう。

- ① Metaph. I³. 1005 a 23-27.
- ② Anal. post. A 11, 77 22-24. 76 a 36.
- ③ Ibid. A 7, 75 a 38-39. 75 b 3-5.
- ④ Ibid. A 9, 75 b 37-40.
- ⑤ Ibid. A 9, 76 a 4-7.
- ⑥ De gen. an. B 8, 748 a 8. 747 b 28. Bonitz; Index. Arist. 432 b 5-10. Maier; op. cit. II r. S. 404 Ann. 2. 參照。

- ① Heyder: op. cit. S. 338. Prantl: op. cit. S. 323.
 ② Prantl: op. cit. S. 130. *xoyxai ôkxax* π(ν)στ(ν)π(ν) Bonitz: op. cit. Comm. ad. 996 b 27.

原理的認識の方法としての歸納法

我々はアリストテレスの初期認識論に於ける最後の問題に達した。すなはちアポダイクシスの原理は如何にして生じ、また如何にして認識しえられるか。アリストテレスはこの問題に對してほゞ次のやうに解明してゐる。我々はさきに、直接なる最初の原理を認識することなしには論證によつて知識することは不可能である、と述べた。しかし直接なる原理の認識についてひとは次のやうな疑問を提起するであらう。原理的認識は論證的認識と同じものであるか、そしてその各々についてエピステメが存在するか否か、或は一方のものについてはエピステメが存在し他のものについてはなにか他の種類のものがあるか、そしてこの原理の把住は内在するのではなくて生成するものであるか、それとも内在してゐながら氣付かれなかつただけであるか。我々がそれを所有してゐるとするならばそのことは背理である。なぜならばアポダイクシスよりもより正確な知識をもちながらそれに氣付かぬことになるからである。しかし以前からもつてゐるのではなくて後に我々が之を獲得するものであるならば、前もつて存在しない認識からして我々は如何にして認識し理解しうるであらうか。なぜなら我々がアポダイクシスについても既に論じたやうに、それは不可能だからである。かくて原理の認識がその把住を認識しない者及びそれを全然有たぬ者に所有され、また生成することが不可能であることは明かであらう。従つて我々がある能力をもつことは必然的である、しかしそれも嚴密さの點でより勝れたものではない。①そしてアリストテレスはこれらの言葉に續いて我々の認識がアイステシスから次第

に高次的なる認識に發展するさまを、明かに「形而上學」の序章を想起させる仕方で、叙述した後に、「第一のもの(原理)が歸納法によつて我々に認識されねばならぬことは明かである、なぜなら感性的知覺もこのやうにして一般者を作り出すのだから。」^②〔ἀνάλογον ὅτι οὐκ ἔστιν ἡ ἀποδείξις ἐπιχειρηματικῆς ἀναγωγῆς καὶ τῆς ἀποδείξεως ἀποδείξεως καὶ ἀποδείξεως ἀποδείξεως〕と述べてゐる。

こゝに言はれたことの意味を我々は恐らく次のやうに解釋すべきであらう。すでに縷説されたやうに、知性的なる認識は凡て豫め存在するところの知識から生じる。ところで豫め存在するところの知識はその本性上(ἐξ ἑαυτῆς)端的に存在するところの原理或は我々にとつて(πρὸς ἡμᾶς)よりよく知られてあるところの感性的なる個物についてでなければならぬ。従つて凡ゆる知識はこの普遍的なる原理を措定してそこから他のものを論證するところの演繹的方法によるか、或は個別的なる事實から出發して一般的なるものを導くところの歸納的方法による外はないであらう。「我々は凡ゆる知識をエバゴゲもしくはアポデイクシスによつて理解する。」^③とこゝで特殊から出發するところの歸納法は普遍から出發するところの演繹法よりも我々にとつてよりよく知られそしてより明かなものであり、^④後者の出發點であるところの一般者のさらにアルケをなすところへ言ひうるであらう。「なぜならば演繹法の出發點が再び演繹法によつて獲られることはできない。それ故にそれは歸納法である。」^⑤〔ἐπιπέδη καὶ ἀπόδειξις ἐστὶν ὁ ἀποδείξις, ὅτι οὐκ ἔστιν ἐπιπέδη ἀποδείξεως〕しかしエバゴゲによつて原理が把握されるといふのは如何なる意味であらうか。こゝにもアリストテレス的方法に對する重大なる誤解の原因が潜むやうに思はれる。すなはちエバゴゲの根柢をなすものは個別的なる感性的事實である。アイステシスなしにはエバゴゲは不可能である。なぜならばアイステシスによつてのみ個別的なるも

のを把握することが可能だからして、それらは決してエピステメの目的となることはできないからである。すなはち一般者はいこれらの知識をエバゴゲによらずして與へることはできない、さらにアイステシスなしにエバゴゲによつてそれを得ることもできないからである。⁽⁶⁾しかしエバゴゲによつてアポデイクシスの原理を認識しようと主張することは、アリストテレスを悪しき感覺論者に陥れしめぬであらうか。

トレンデレンブルクは、我々がさきに「ニコマコス倫理學」から引用したところの *ἐπιτηδὲμα* の中に含まれた困難を明確に指摘してゐる。⁽⁷⁾それはかうである。この言葉は一般者の凡ゆる根源が歸納法であることを意味してゐるに外ならぬ。歸納法がたとへば經驗的規則に於て一般者の原理、結論の大前提でありうることは疑ひを容れえないし、また上の言葉に先行する「歸納法は一般者の原理である」(*τὸ τῆς ἐπιτηδὲμα ἀρχὴ ἐστὶ κατὰ τὸν καθόλου*)といふ言葉はこのことを表示してゐる。しかし *ἐπιτηδὲμα* がたゞこのことを意味するならば、それは空虚な反覆に過ぎぬであらう。之に反して一般者の唯一の根源が歸納法であるといふことをそれが意味しまた意味せねばならぬとするならば、この論理的 *ἐπιτηδὲμα* は虚偽の推理を導くこととなるであらう。結論が、より高い一般者から導出されることを必要としないやうな一般者からなされるとき、經驗に於てのやうに、大前提は歸納法に基礎づけられることを必要としないで、それは結局經驗の必然性をもともに條件づけるところのより高い源泉をもつことができるであらう。さうでないならばアリストテレスの認識論は凡てひとつの循環論に陥ることとなる。なぜならば大前提が歸納法にのみ依倚するならば、それはまさに引き出さるべき結論に依倚することとなるからである。凡ての一般者がたゞ歸納法の一般者、經驗であるかのやうな凡ての考へ方はアリストテレスの深い理解に矛盾するのである。すでに「分析論」に於て論ぜられてゐるや

うに、論證の究極の原理は直接なる命題、證明されざる定義 (*ἁπλοῖ καὶ ἀνεξήγητοι*) である。歸納法が原理であるならば、そこには論證が存することとなり、それは學の原理としてヌウスを規定する。歸納法が最後の根據であるならば、ヌウスではなくアイステシスが原理となるであらう。それ故にこの「倫理學」の第六章の究明がその結語としたやうに、「ヌウスが原理の根源であるといふことが残るのである。」^⑧ (*ἀρετῆς νόσς εἴναί τὸν ἀρχαῖον*) 従つて *ἐπινοήσις* はそれが冗長なる反覆に非ずんば基礎づけられざる非なるものである。かゝる理由からしてトレンデンブルクはこの言葉を後人の挿入 (*Einschießel*) として、これを除外すべきことを提議してゐる。

原理の把握がなによりもヌウスによつて可能である、といふトレンデンブルクの解釋は全く正しい、のみならずアリストテレスに於けるエバゴゲがたゞ叙上の意味にのみ極限されるべきであるならば、エバゴゲは原理の根源として決して充分でない、それは原理の把握を企圖することはできない、といふことも極めてロゴス的であらう。しかしアリストテレスに於てエバゴゲはたゞアイステシスをのみつねにその出發點にもち、そしてたゞ我々の經驗的認識の方法としてのみ妥當すべきであらうか。我々は原理の認識をヌウスに委ねてエバゴゲからその權利を奪ふまへに、アリストテレスが *ἐπινοήσις* と明示した所以のものを明らかに精査すべきであらう。

- ① Anal. post. B 19, 99 b 20-34
- ② Ibid. 100 b 3-5.
- ③ Anal. pr. B 23, 68 b 13-14. A 4, 25 b 30-31. Anal. post. A 2, 71 b 17-18. A 18, 81 a 38-40. Phys. ① I, 252 a 22-25. Rhel. A 2, 1356 b 7. 論證法の定義 *ὁ ἀπλοῦς* Top. A 12, 105 a 13-14. Anal. post. A 23, 68 b 15-17. 參照。
- ④ Anal. post. A 3, 72 b 27-30. Top. A 12 105 a 16-19.

- ⑤ Ehn. Nic. Z 3, 1139 b 26-31.
 ⑥ Annl. post. A 18. Phys. B 1, 193 a 4-9.
 ⑦ Trendelenburg; Historische Beiträge zur Philos. II. 1855. S. 367 ff. 40.5-12 Brandis; op. cit. II, 2. S. 1443 44.
 ⑧ Ehn. Nic. Z 6 1141 a 7.

エバゴゲはいふまでもなく「個別的なるものから一般的なるものへの方途」(ἐπιτακτὴ τῆς ἀπὸ τοῦ κατ' ἑκάστου εἰς τὴν καθόλου ἐπιβολῆς)として定義される。そしてそれは對話に於て嚴密なる辨證的推理に從つて、對話者の提示した一般的概念を個別的なる事物について論明してゆき、對話者の承認を餘儀なくさせるところのかのソクラテス的方法に直接結びついてゐることも明かであらう。①しかるにソクラテスのエバゴゲは、我々がすでに指摘しておいたやうに、事物の本質としての一般者を直觀的に證示するところの契機とそして個々の表象に共通なるものとしての一般者を論理的に歸納するところの契機との二つを擔つてゐた。②そしてこのことが定義とともにソクラテス的方法の遂行を可能ならしめたのである。アリストテレスがエバゴゲをシュロギスモスの特殊の形態(τὸ ἐπιτακτικὸν οὐλογοῦν)として規定したとき、③それがかのソクラテスの歸納法に於ける論理的契機の形式化であることもすでに明説を必要としないであらう。しかしあたかもアリストテレスのシュロギスモスがプラトンのダイアイレシスの形式化であると同時に、そのλόγος ἀόριστοςのプラトンの精神を繼紹するものとしてアポダイクタイケが残されたやうに、ソクラテスのエバゴゲの形式化とともにそのλόγος ἀόριστοςの精神の遺産としてアリストテレスがエバゴゲの直觀的契機を堅持したと主張することはかの哲學者の發展史的位置を極めて正しく告知するやうに思はれる。そしてこの意味に於けるエバゴゲは主としてホリスモスにかゝはるものであり——アリストテレスが「分析論前書」に於て、三角形の内角の和が二直角である

ことはエバゴゲによつて知られる。」と言つたのはこの意味である——さらに圖式的に語ることが許されるならば、一般者に於ける普遍性(*kata panous*)と本質性(*kata tes*)との形式的把握にむかふのはシユロギスモスとその特殊形態としての論理的エバゴゲとであり、その本質的把握にむかふのがアポデイクシスと直觀的エバゴゲである、とさへ言ふことが出来るであらう。總じてアリストテレス論理學の理解はこのソクラテス・プラトンの思想の形式化と本質化との明別にかゝつてゐるのである。この意味に於てマイヤーがアリストテレスのニバゴゲの中に、對話的論議によつて對話者に主觀的信念と説得的信憑とを生ぜしめそして對話の目的を達するところの對話的なる基礎づけの形式(*dialektische Begründungsform*)と存在及び知識の究局原理、すなはち推論によつてもはや達しえぬところの命題の客觀的認識を可能とするところの學的探究の方法(*wissenschaftliche Forschungsmethode*)とを區別しようとしたのは極めて正しい識見と言はねばならぬ。^⑤以上のことからして *enarghē ep'ēkē eni kai tou zōōtiou nōi: to a'riov* なるアリストテレス的思想とが決して矛盾しない所以が明かであらう。

エバゴゲに於けるこれら二つの區別とその意味關聯とは次のことから明かであらう。すでに言はれたやうに、アポデイクティケが *ἐπιπέδη* の世界に屬してゐるに反して、エバゴゲの領域は *ἐπιπέδη* よりも *ἐπιπέδη* の世界である。*ἐπιπέδη* はアポデイクシスの手續きを経ることなくして受容されるところのもの (*ἀναπόδεικτον*)、それ故に特殊なる事實的世界であるとともにアポデイクシスのアルケたる一般的なる原理的世界を意味する。前者を把握するのはいまでもなくアイステシスであり、その方法もエバゴゲとして規定される。「なぜならばアイステシスもこのやうにして一般者を作り出すのだからである。」我々が輝かぬ星は近いといふとき、「この命題はエバゴゲ或はアイステシスによつて把握されたのである。」^⑦

かくてこゝではアイステシスによる認識とエバゴゲとは殆んど同一視され、エバゴゲの原始的形態としてアイステシスが措定されてゐるのである。しかし原理的事實を把住するのにもまたエバゴゲである。このことをアリストテレスは「ニコマコス倫理學」に於てさらに明瞭に叙述してゐる。「ある場合に於ては、たとへば原理についてもさうであるやうに、ことながら立派に擧示されるだけで充分である。ことからは第一のもの、すなはちアルケである。アルケの中あつたものはエバゴゲによつて、他のものはアイステシスによつて考察される。」(ἵκων ἢ τὰ τὰ ὄντι βαρύτεραι κατὰς, οὐκ οὐκ κατὰ τὰς ἀφ' ἑαυτῶν τὰ ὄντι τρωτόν καὶ ἀφ' ἑαυτῶν τὸν ἀφ' ἑαυτῶν ὁ αὐτὸν ἐπισημασθέντα αὐτῶν ἀφ' ἑαυτῶν) ⑤として「アルケと呼ばれたものは、*ὄντι*に關する二つの世界を含むことは明かであらう。こゝからしてトレンデレンブルクによつて提起されたエバゴゲに對する不信任は理由なきものと言はねばならぬ。

① Metaph. M 4, 1078 b 27-29.

② 拙稿、哲學研究、第二百四十一號、七九頁以下參照。

③ Anal. pr. B 23, 68 b 15-29.

④ Ibid. B 21, 67 a 21-26. Anal. post. A 1, 71 a 19-21.

⑤ Maier; op. cit. II 1, S. 385.—die aristotelische Methodik kennt zwei Arten von Epagoge: die Epagoge als dialektische Begründungsform und die Epagoge als wissenschaftliche Forschungsmethode. 頁 S. 43f.

ゴールケは彼の近著に於て、エバゴゲに關するマイヤーの上の所説に反對して、これを發展史的に解釋しようと試みてゐる。(Gohlke; Die Entstehung der aristotelischen Logik. 1936. S. 107 ff.) その動機は極めて正當であるが、彼の試みはなほ成功してゐないやうに思はれる。我々がエバゴゲのアリストテレスの意味を發展史的に把握すべきであるならば、ゴールケが試みたやうに單にエバゴゲの形式からだけではなく、むしろその思想内容からなさるべきである。すなはちプラトンの方法か

らアポダイクティケとシュロギスモスが發展したやうに、ソクラテスの方法からエバゴゲの二重の意味が分岐發展したと解すべからざる。なほこの問題については Andrus; Die Prinzipien des Wissens nach Aristoteles, 1905, S. 31 ff. Heyder; op. cit. S. 232 f. Zeller; op. cit. S. 241 Anm. 2 参照。

⑥ Anal. post. 88 a 5. Mater; op. cit. S. 423.

⑦ Ibid. A 13, 78 a 34-35. B 2, 90 a 26-30.

⑧ Eih. Nic. A 7, 1098 b 1-3.

けれども以上によつてもなほ原理的認識の方法としてのエバゴゲが凡ゆる疑義から解放されたのではない。我々はこれら二種のエバゴゲの意味關聯をさらに問題とせねばならぬ。これらのエバゴゲは孰れも「個別的なるものから一般的なるものへの行程」であることに於て共通なる方法的基礎の上に立つてゐる。そしてエバゴゲはアポダイクシスに比して「より信憑しうべきものであり、より判明なるものであり、アイステシスに従つてよりよく知られるもの」であり(κατα τα αδιόργανα γνῶσιμα)「また多くの人々に共通なるものである」①。原理が歸納的に認識されると言はれども、そのエバゴゲは「アイステシスに従つてよりよく知られるもの」となることから全く自由ではないやうに思はれる。なぜならば、さきにも引用されたやうに、アリストテレスはエバゴゲの感性的基礎について次のやうに言つてゐるからである。「アイステシスをもたぬ人々が歸納することは不可能である。なぜならアイステシスは個別的なるものについてであるから、といふのはエピステメはそれらを把握することは不可能であるから。すなはちエバゴゲなしに一般者からも、またアイステシスなしにはエバゴゲからも不可能であるから。」(οὐτε τῶν ἐκ τῶν αἰσθητῶν καὶ ἐπιτακτικῶν οὐτε ὁ ἐπιτακτικῶν καὶ τῶν αἰσθητῶν) 我々は個別的なるものをアポダイクシスによつて知るかエバゴゲによつて知る

かである。しかるにエバゴゲなしにはアポデイクシスもなく、さらにアイステシスなしにはエバゴゲもありえない。従つてアイステシスなくしてはエピステメもありえない。このことを證示するものとして人々は「分析論」の終章に於けるアイステシスから原理の認識に至る抽象化の過程を引用することをつねとする。このやうに原理的認識の方法としてのエバゴゲが感性的認識の方法たる原始的エバゴゲと本質的に異なるものでなく、その根柢に於て感性的事實の世界と連るとき、かの原理的エバゴゲはその名にそむくことにならぬであらうか。アリストテレスの例を援用するならば、我々が月の世界に在ると假定し、そして地球が太陽との間にあるのを見たとするならば、我々は月蝕の原因を知ることができなかつたであらう。なぜなら我々は月蝕の事實を知覺するけれども、その根柢を全く知覺しないからである。知覺は一般者に關することではないからである。尤もこの事實を屢々觀察することからして、一般者を追求することによつて我々はアポデイクシスをもつ。なぜなら個々の多くのことがらから一般者は生じるのだからである。^③

かくて「アルケの中、或るものはエバゴゲによつて、他のものはアイステシスによつて、また他のものは習慣によつて、さらに他のものは他の仕方で論究される」とさへ言はれるのである。^④たしかに多くの事實の觀察から歸納して、我々は事實の一般的規則に到達することができる。しかしそれはなほ一般的事實であつて事實的一般性ではない。かゝる一般性はそれを含むところの凡ゆる事例が枚擧しつくされるときにのみ完全となるのであるが、それはたゞ理論的のみに可能であり、従つて經驗的一般者はアポデイクシスの根柢たる原理的一般者を暗示するのみである。それはたかだか事物の存在或は非存在を證しえても事物の本質を證することはできない。^⑤

それ故に我々は原理的エバゴゲを感性的エバゴゲから區別する所以の本質的なものを他に求めねばならぬ。それ

を我々はアリストテレスの次の言葉の中に見出すことができるであらう。「我々が見さへすれば探究しないであらうやうな二三の場合がある。それは見ることによつて知るからではなく、むしろ見ることからして一般者をもつ故である。
 (—*oûk eis eidoses tō opōi ên, eis tharres to xathion êx tou opōi.*) たとへばコップに孔が穿れてゐて、光が透るのを我々がみたときに、何故光るかは明かである、個々の場合別々に見るのであるが、同時に凡ての場合にさうであることを直観するからである。」⁽⁶⁾ (*oûk, nêv tharres ep' êkastos, yofhrai o' zeta ou êti haran oûtas.*) それ故に論證的なる *oûti* に於けるアルケとしての *oûti* を單に事實的妥當性をしかもたぬところのエバゴゲに於ける *oûti* から區別する所以のものはヌウスである。アルケの認識は従つてエバゴゲに結合したところの直觀的思想たるヌウスによつてはじめて可能となる言はれねばならぬ。⁽⁷⁾ アリストテレスが屢々ヌウスをエピステメの原理として示したのはこの意味に於てである。⁽⁸⁾ (*oûti, tō nou nou deôv êntias êntias.*) かくて原始的エバゴゲと原理的エバゴゲとを導くものはそれぞれアイシシスとヌウスとである。我々はさきにアリストテレスの原理的認識の方法としてのエバゴゲを動機づけたところのソクラテスのエバゴゲが直觀的性格を擔ふことを指摘した。このことはアリストテレスに於てエバゴゲをして原理の認識たらしむる所以のものがヌウスであることによつて拒否し難く證示される。そしてソクラテスの直證的エバゴゲの精神を傳承しとしてそれをミニュト的に語つたのはプラトンのアナムネシスの思想であつたが、それをロゴシ的に語つたのはアリストテレスのエバゴゲである、とさへ我々は論ずることができるであらう。かくてプラトンのアナムネシスとアリストテレスのエバゴゲとは、その外見の異相にかゝはらず、根源的には同じソクラテスの方法の發展なのである。この意味に於てジーベックが通常最もアリストテレス的なる認識過程を表明すると信じられてゐるところの「分析論後書」の結

章に於ける感性的知覺から普遍的認識に至る歸納的方法をプラトンの「ポリテイア」に於けるかの古典的なる方法に對比せしめ、前者を「プラトンのアナムネシス」がその神話的扮装を脱却して心理學的に現示したもの」と解したのは極めて卓抜なる識見と言はねばならぬ。^①たゞアリストテレスはそれに先行する場所に於て明かに知識の「想起」の起源を廢棄してゐるからして、我々はジーベックの解釋を言葉通り受けとることはできないけれども、そしてこの場所はむしろ「バイドロス」(二四九B)に比較されるを至當とするやうに思はれるけれど、なほ我々はそこに歸納的方法のソクラテス・プラトンの精神への親和性を汲むには充分であらう。我々はプラトンが「ポリテイア」に於てアイステシスの中に、それ自身で充分規定され知性を觸發せざるものと、知性を理論的考察にまで觸發するものとを區別したやうに、アリストテレスもアイステシスの對象を個別的なるものと一般的なるものに峻別し、我々の認識を動機づけるものは後者に關する限りであることをみてきた。彼にとつても認識はアイステシスとともに始まるけれどもアイステシスから發現するのではなく、認識のヘクシスはプラトンに於てのやうになほヌウスであるに外ならなかつた。そのことは「分析論」の最後に於ける敘述をたどることによつてさらに明かにされる。彼は原理を把握するものとしてヌウスが指定さるべき理由を次のやうに誌してゐる。ヌウス以外の他の如何なる種類の認識もエピステメよりより一層正確であるものはない、しかるに原理はアポダイクシスよりもよりよく知られるものであり、エピステメは凡て論理によつてある。(γενεσθαι) 従つて原理の知識はありえない、けだしヌウスを措いて如何なるエピステメもより眞ではありえないからして、ヌウスは原理を把握する。そしてそれはこれらの考察のみからではなく、アポダイクシスの原理は再びアポダイクシスではない、従つてエピステメの原理はエピステメではないといふことから起つてくる。ところ

でもしエピステメの外に眞理を把握する他の種類を我々がもたぬならば、ヌウスはエピステメのアルケであるであらう。そして原理がアルケについてあるやうに、凡てのエピステメは同じ仕方で凡ての事物に對してある。(XVI, 2, 204, 21, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000)

しかし我々が「分析論」のかの場所から學ぶのはヌウスがエピステメのアルケであり、論理的要請であることであつて、ヌウスはそれ自身如何なる構造をもつてゐるか、また如何なる範圍と制限とに於て、また如何なる仕方によつてそれが原理的なものを把握するか、については何も語られてゐない。^⑩このことはまたアイステシスについてもあてはまる。すでに我々がみてきたやうに、こゝから我々の觀取しうるのは感性的對象の一般性と個別性との問題であつて、アイステシスはそれ自身如何なる構造をもつてゐるか、如何なる權利と制限とを以てヌウス或はディアノイアに關聯しうるか、について我々が知りうるのは以上に語られた限りに於てであつた。そしてこれらの思想がプラトン主

義の發展を前提としてゐることともはや疑ひを容れえないであらう。これらの諸問題を最もアリストテレス的な仕方
に於て説明するに於ては、*Top.* A 12, 105 a 16-18.

- ① *Top.* A 12, 105 a 16-18.
- ② *Anal. post.* A 18, 81 b 5-9.
- ③ *Ibid.* A 31, 87 b 37-88 a 5.
- ④ *Eth. Nic.* A 7, 1098 b 2-4.
- ⑤ *Anal. post.* B 7, 92 a 37-b 1. *Metaph.* E 1, 1025 b 14-15.
- ⑥ *Ibid.* A 31, 88 a 12-17.
- ⑦ *Maier*; *op. cit.* II 1, S. 410 f. *Geysen*; *op. cit.* S. 257 f.
- ⑧ *Anal. post.* A 33, 88 b 36. B 19, 100 b 15.
- ⑨ *Siebeck*; *Untersuchungen zur Philos. d. Griechen* 2, 1888, S. 159 ff. アリストテレスが「分析論前書」の或る場所に於て明かに彼の *Henketa* を *Metan* の *Metanomenis* に代位せしめたこと (Anal. pr. B 21, 67 a 21) 我々の解釋の顯なる証左として役立つべきである。*Erreyer* und *Theorie der Induktion bei Aristoteles*. (*Arch. f. Gesch. d. Philos.* 1892 Bd. V) S. 303 f. 参照。
- ⑩ *Anal. post.* B 19, 100 b 3-17.
- ⑪ 拙稿「アリストテレスに於ける眞理概念の發展」*哲學研究*、第二百八號、一〇二頁以下参照。
- ⑫ *Trendelenburg*; *Hist. Beitr.* II, S. 373 参照。